

災害ボランティア報告

自然科学研究科修士2年 内藤晋介

2004年、新潟県は大きな二つの大災害に見舞われた。7.13水害と10.23中越地震である。その被害は甚大なもので、被害状況は多くの人を知る所である。私は水害後に2回、地震後に1回、農学部が企画した災害ボランティアに参加させて頂いた。

水害後の第2回ボランティアは、8月13日に新潟県小国町の森光集落において行われた。すでに水害後1ヶ月が経過していたが、水害の復旧作業は被災地域の中心部において盛んに実施されており、農地やその周辺設備では遅延がみであった。我が農学部のボランティア参加者は、遅れている農地や周辺設備の修復を目的として集められたものであった。

この森光集落での作業では、水害によって土砂が堆積した用水路の泥上げを行った。泥上げといっても、ドブさらいとはまったく次元の異なるものであった。体積した土砂の中には大きな石が多く混じっており、スコップの先が石に邪魔され泥に入っていないか、持ち上げるのも非常に重労働であった。また泥の深さも50cmくらいの箇所もあり困難を極めた。森光集落は高齢者の多い集落であるので、微力ながら役に立てたかもしれない。

水害後の第3回ボランティアは、8月23日に水害で最も被害の大きかった中ノ島町において行われた。作業は、第1回と同じく、カントリーエレベーター周辺の水田用水路の泥上げであった。これらの水田は、水害当時、稲の上に1mもの堤防から溢れた水で覆われたらしく、稲の根に近い部分や、葉先は黄色に変色しており、本来ならばこの時期は頭を下げるべき穂先も、ツンツンと上に向いていた。隣接する大豆畑は全滅しており、改めて今回の水害の恐ろしさを感じた。泥上げは、前回より大きな石が少なく、順調に作業をこなすことができた。

中越地震後のボランティアは、再度小国町において実施された。このボランティアでは森光集落と、

山間に位置する山野田集落において二日に渡り実施された。小国町に向かう車の中地震の爪痕が次々に目に飛び込んできた。ひび割れている道路、飛び出ている下水管、傾く家。私達に何ができるのだらうと、車内で考え続けた。

しかし、小国町役場に到着し、ボランティア作業を斡旋してもらおうとしたが、もうやることがないという。車内からあれだけの爪痕が見えたので、非常に不可解に感じられた。

仕様が無いので、水害後のボランティアで作業した森光集落に行くことにした。森光集落でも道路は崩れ、下水管は飛び出し、住居は傾いている。住民の方に、直接やれることはないかと聞き、ひび割れて雨が降ると危険なゲートボール場にビニールシートを張る作業と、石垣から崩れた石の撤去作業をすることになった。時間にすると2時間程度の作業で一日目は終了した。実際は一日だけの計画であったが、ほぼ何も現地に貢献していない為、次の日も小国町で作業をすることに決定した。10名程度のボランティア隊であったが、私ももう一人(講座の後輩)を小国町に残し新潟へ一時帰り、次の日の天気を見て再度、小国町に来ることになった。

私達2名は、私達の講座が以前よりお世話になっている、小国町在住の方の所で泊めてもらうことになった。その方は建築関係の仕事に携わっていて、今回の地震に対する町役場の対応の悪さを夜遅くまで話してくれた。地震の被害を被った建物の危険基準認定の不合理性や、ボランティアの斡旋の仕方についてなどを聞いた。ボランティアの斡旋については、町役場は町民から要望があってからボランティアを斡旋していることを聞いた。要望がないからといってボランティアが必要ないと言い切るのはどうかと思う。あれだけの被害状況をみれば、要望がなくても人手が要ることは明白である。忙しいのは分

かっているが、役場職員自身が要望を聞いて回ることが大事であることを聞いた。

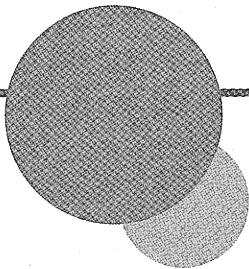
二日目は、その方の紹介で山野田集落という、山間の10件程度の集落で作業することになった。その集落の住民の一人は、ボランティアで作業してもらうのはありがたいが、何をやらせてもらえばよいのかわからない、と言っていた。しかし、私達は住民の方々から要望を聞いて周り、ダメージを負った民家からの家財道具の持ち出しの手伝いや、公民館やイベント施設の崩れ落ちた壁や、壊れた物の撤去作業を行うことになった。民家や施設は床にガラスや様々な物が散乱しており、壁が剥がれ落ちていた。もう何年も人が住んでいないような悲惨な状況であった。山野田集落の民家は古い造りであったので多くの家が被害を受けた。高齢者も多く、集落の再建は難しいのではという。

今回の中越地震のボランティア活動には不具合があったと思う。実際現地に行き、役場にボランテ

ィア活動を申し出ても、ボランティアは足りてると言われた。しかし、実際には山野田集落のような人手の欲しい状況はたくさんあるだろうし、行政の情報収集不足というしかない。それだけでなく、我々大学にも問題があったであろう。事前に、現地で何が要求され、どの程度人員が必要であるのか、十分に調べてから行くべきであった。ただ行けば良いというものではない。自分達学生に現地で具体的に何ができるのか、十分に考慮すべきであった。

また、一度被災地に干渉したのであれば、継続的に現地で作業すべきであった。中越地震のボランティア活動が、1回だけで途切れてしまったことは非常に残念である。山野田集落の住民の方が言っていたように、住民の方々は途方にくれている可能性があり、時間が経てば冷静に状況を掴め、その時こそボランティアが必要だったのではと考える。

被害のた農地の復旧は、雪の溶けた春先にある。もう一度農学部の出番である。



「7・13水害」ボランティアの参加と そのきっかけについて

自然科学研究科 修士1年 高原康人

新潟中越地方は、7月13日に水害に見舞われ、新潟大学農学部は中之島町でボランティア活動を行った。私は2回目の8月22日のボランティアへ参加した。

実際に現地へ足を運んでみると、浸水によって荒れた家屋や水に流された墓石などが見られ、水害による被害がどれだけすごいものかということがわかった。それはテレビや新聞などから得られる情報よりも、しっかりとした実感として感じられ、大きな災害の被害にあったことの無い私に、災害の恐ろしさを教えてくれた。

このような町の惨状のなかで、私たちが行った活動は農業用水の側溝さらいだった。私はてっきり町

の方で作業を行うと思っていたため、少々拍子抜けしてしまっただけで、水を含んだ土は重くこれも大変な作業であった。少人数で行っていたのでは長い時間を要しただろう。

普段、災害というと、町の方に目がいてしまいがちだが、災害による影響は農業や工業などの産業へも及ぶということに気づかされた。考えてみれば私たちは農学部であるのだから、農学部の視点から役に立てるべきなのかもしれない。今回行った活動は農学部らしい活動であったと言える。災害など起きて欲しくはないが、また再び農学部としてボランティア活動を行う際は、我々農学部からの視点で仕事を見つけることを念頭において働きたいと思う。